

剣闘士とポンペイ最後の日

本村凌 一

私が本日お話す内容は、現代に迎合したような話で、ちょうどこの時期に、「ポンペイ」という作品が封切られたからでもありません。

私は、ポンペイも、剣闘士のことも研究していますので、試写会に呼ばれ、パンフレットに専門家からの視点ということで解説を二ページほど書きました。その映画のことを宣伝する訳ではないのですが、本日は「剣闘士とポンペイ最後の日」についてお話をいたします。

「歴史学は医学と修辞学の間誕生した」ということをアルナルド・モミリアーノという二〇世紀を代表するローマ史家が言っております。モミリアーノはイタリア人ですが主にロンドン大学で教鞭を執っていた大学者です。この言葉の意味はどうかというと、その背景には紀元前の五世紀に歴史学も医学も誕生したことがあります。もちろん単純な治療という意味の医学であれば、それ以

前からあったわけですし、一方、年代記風のクロノロジーを記すというようなことであれば、それ以前から歴史の出来事をつづるということはありました。それが、なぜ、紀元前五世紀のアテネにおいて同時期に発生したのかということを考えたときに、非常に、意味のある視点ではないかと思えます。

医学というのは、基本的に解剖学と結び付いていて、死骸を解剖して、体の仕組みを知り、それに対して何らかの処置を講じる、つまり生きている人間のいろいろな兆候を見て、診断を下すということをするわけです。

一方「歴史の父」といわれているヘロドトスが歴史記述を、たんなる年代記ではなくて、歴史叙述としてやり始めたときには、いろいろな過去の出来事が関係していきます。

ヘロドトスは、ペルシア戦争の歴史を書きましたが、その間に世

界を訪れています。ただしその当時の世界中ですから、地中海世界ですね。例えば、エジプトまで行ってピラミッドも実際に見ていたりするわけです。そのように、きわめて身近なところで見聞を広め、できる限りの地理的あるいは時代的なデータを集めて、自分の判断を下すということを行っています。ギリシア語のヒストリエ (Historie) というのは、そもそも「調査」という意味ですから、そういう形で歴史叙述が行われるようになったのと、医学が、たんなる治療の技術ではなくて、全体として因果関係のなかで人間の身体を考えて判断するという、いわば学問的な姿勢が生まれるのは、何らかの共通性があるのだということです。そうすれば、医学と歴史学の発生の時期が重なるということは納得できるわけです。

それだけではなく、なぜ、それとともに修辞学が引っ張りだされるのかといいますと、医学というのは、要するに自分の身体のことですから、ある種、非常に真剣味があるわけです。自分の病気がどういう原因なのか、そして、どのようにすれば治るのか、あるいは、治らなくても現状維持でいられるのかというようなことが、非常に深刻といえますか、真剣な問い掛けになるわけです。

そのために、医者立場からすれば、的確に判断してあげればいい、余計な言葉を使う必要はなくて、この原因はこうですから、こういうふうにしたらどうですかというようなことで、正確に判断を下せば、それでいいんだという考えにいたります。

ところが、歴史学はそういうことではない。過去のデータを広く参照しながら、そして、いわゆる社会、これからのわれわれがどう

いうふうにするかという、つまり歴史から何を学ぶかということが考慮されます。もちろんただ過去を知ればいいという考え方もあるでしょうが、多くの人にとって、やはり歴史から何かを学ぶというのは、歴史学を学ぶ場合の基本的な姿勢じゃないかと思うのですね。それにもかかわらず、大哲学者ヘーゲルは、それとは逆なことを言っています。どこまで本気かは知らないけれども、ヘーゲルは、われわれが歴史学から学んだことはたった一つだけである、それは、われわれが、歴史から何も学ばないということだと、言っています。それは皮肉な見方として成り立つかもしれないけれども、われわれが歴史を学ぶ場合は、何かそこから得られるものがあるというふう

に考えるのが普通でしょう。

現在、日本でも、日韓関係、日中関係などいろんな問題は起こっていますし、これまでの歴史の経緯を考えたりしながら、それはそれなりの判断があっても、一日や、それから、一カ月や、一年で終わることではなくて、何年もかかることだし、それから、それが必ずしも的確な判断であるかなんてことは、誰にも言えないわけです。そのときに、モミリアーノが言った、修辞学が非常に大事なのだというのとはとても示唆するところがあります。

つまり、医学には、修辞学は必要ない。的確な判断を、そのときに、わかりやすく、正確に伝えてあげればいいのです。でも、歴史学には、過去から判断して、こういう方向性があるとかいうときには、やはりある程度の修辞学のテクニクを用いてわかりやすく説明することが必要だということです。それがモミリアーノが多分言いたかったことではないかと思えます。

だから、歴史学は、医学と修辞学の間で誕生したといえるでしょう。そういう方法を持っていないと、医学のように、必ずしも個人として切実な問題ではないが、社会とか、国家とかいう単位で考えれば、それは、もっと切実な問題かもしれない。しかし、今日、明日といった、単位で判断できることではないから、そこには、ある程度のレトリックが必要なのだとようなことだと思います。

前置きが長くなりましたけれども、私がなぜ、ポンペイだの剣闘士を取り上げたかという、歴史を取り上げる場合に、これは外国史をやっている人間のひがみかもしれません。というのもやはり日本史というのは、今生きている身近な地域の歴史でありますから、それなりの、たとえ古い時代であっても、どこにでも、町中を歩けば、かつての遺跡、遺物、あるいは神社仏閣、いろんなものが残っておりますし、そういう事例というものは、われわれの身近にあるわけです。

それと比べて、外国の歴史の場合にも、近現代史であれば、まだ比較的、例えば、ヨーロッパの一九世紀や二〇世紀、特に二〇世紀以降の問題っていうのは、今の現在にも非常に関わりがあるわけです。たとえ日本の問題がなくても、例えば、今現在起こっていることと言えば、ウクライナやクリミアの問題などは、ついこの間まで、普段はその地域に関心がなくても、それなりにみんな関心を持って、新聞を読んだりテレビを見たりはすると思います。ところが、外国史の前近代になると、なかなか関心を持ってもらえない。これは、古くなればなるほど、そういう傾向があります。

私は古代ローマ史を専門にしていますから、古代ローマ史の話題をするときに、一回限りでお話をする講演のような場合には、ローマ史あるいは古代史の専攻をする人々だけが来ているわけではないし、広く関心を持ってもらうためには、レトリック的手法を使わざるを得ないところがあります。

レトリックといった場合は、大きく二つあると思います。一つは、話し方のうまさといいますか、話術の芸というものがあって、そういう意味でいったら、落語家や講談師に原稿を適当にアレンジして読んでもらえば、多分、一番いい話ができるのではないかと思います。

先日、西洋古典学会で講談師が来て、「イリアス」を講談風にしやべるのを聞く機会がありました。歴史や古典の専門家が集まる、そういう場所でしたが、皆さん非常に関心を持ったようです。「イリアス」の話は、今、岩波文庫で読むようなテキストとして固定しています。「イリアス」は、ホメロス作となっていますが、ホメロスという人は、その時代の文字を一字も知らないような人で文盲でした。彼のような吟遊詩人たちは、あくまでも語り部としてただけで、ホメロスが実在したかどうかは別にして、たとえばお祭りか何かのときに、聴衆をうまく引きつけてその話をしていかなきゃいけない。

だから、今の固定しているようなテキストではなくて、その場にに応じて、恐らく聴衆の反応を見ながら、何かこちら辺は、みんなが面白がっているから、少し誇張して話そうとか、そういうことは、ごくありふれていたのではないかと思います。その講談をやられた

方と後で話をしたときに、やはり聴衆の反応を見ながら、少し変える部分もあるというふうに仰っていました。実際にそれはそうだったと思います。

当時の人は、「イীরリアス」を一種の歴史物語として聞いているときには、話術のうまさといえますか、そういうところでやっているわけです。でも、私は、別にそんな、特別に話術を訓練したわけでもないし、そういうことができるわけではありません。

もう一つのレトリックの手法としては、テーマというものがあると思います。古代ローマを語るときに、たとえばローマ法の民法的手続きについて話しますなんてことにしたら、きっとほとんどみんな帰っちゃうんじゃないかと思うのです。そういうことよりも、公開中の映画の話でもからめて、もし機会があったら見に行けるというテーマだと興味を持てるのではないかと思います。

さて、この映画の中では主人公として剣闘士が出てきて、ポンペイ埋没の最後の日までの数日間におこることが中心となって物語が進んでいきます。かつての奴隷上がりの、いわばバーバリアンの捕虜となって、奴隷になって剣闘士になった主人公が、ローマの貴婦人の女性と出会い愛し合うということ、このヴェスヴィオの大噴火のところらぶつかって、やがて二人がどうなるかという話です。そういう剣闘士とポンペイ最後の日が背景に重なったような話なので、モミリアーノが言った、医学と修辞学の間生まれた歴史学の話題として、今回、興味を持っていただけるような話題で話させていただきます。

まず、剣闘士の話題から、もちろん、ポンペイが中心になりますけれども、レジュメのほうに、当然剣闘士が演じられる円形闘技場について、十何個かの例を挙げておきました。そのなかに、闘技場のポンペイ人とヌケリア人の抗争を書いた壁画があります。

残存する円形闘技場として、ポンペイでは紀元前八〇年頃建てられたもの（一四〇メートル×一〇五メートル）が残っていて、現存するなかでは最古です。古いものからだすとトリ、ルチエラ、メリダ、など数多くが残っています。その中でも大きいものでは七九年のローマ（一八七、七メートル×一五五、六メートル）、一〇〇年前後のカプア（二七〇メートル×一四〇メートル）などがあります。

実際には、このポンペイには、闘技場に昇る階段を支える柱が幾つも並んでいます。これらを数えてみると、実態とかなり違うんですよ、数がね。それで、美術史の人に聞いてみましたけれども、古代人がそんな正確なことをなど気にしていない、リアルに描くことなんか何にも気にしていないのです。図柄としてよければいいんだろうというような、そういう意識であったということのようです。

ポンペイは、今でこそ非常に保存度のいい形で残っています。もちろんそれ以前より、ポンペイよりもちょっと北のほうに位置するカプアには、さらに古から円形闘技場があったんですけども、現在残っている限りでは、最古のものがこのポンペイのもので、大体紀元前の八〇年から七五年ぐらひにかけてのものです。

スライドを見てもありますが、これは、同じ剣闘士の入り口を見たものです。それから、これは、葬礼門というので、これは西側にあるのですけれども、剣闘士が殺されたときには、西側から鉤で引っ張って、この中に引きずり込んでいたという、そういう遺体の搬出口になるところです。

そこから歩いて一〇分ぐらいのところに、剣闘士の営舎あるいは訓練場があったというふうにいわれていて、非常に保存度がいい形で残っています。

ここは、二階建てになっていて、それぞれ、一部屋に二人の剣闘士が寝泊まりするようになっていました。だから、一つの入り口から、二階もありますから、二人ずつで四人がここで生活していたようです。二人ずつというのは、一人だと、自殺する可能性がある、何か良からぬことを考えないとも限らないので、取りあえず二人ずつだというふうにいわれています。

ローマのコロッセオですと、天井には、東京ドームみたいに天幕が張ってあって、ときにはこの天幕にいろいろな色がほどこされています。ですから日が照っていると、非常にカラフルに、それが下の舞台であるアリーナに映るわけですね。天幕というのは、一つは日除けでもありますが、ローマのコロッセオのような大規模なところになると、幾つかの色が地面に反映して、それで非常に色とりどりの演出効果があったようです。

ほかにもいっぱい円形闘技場がありますけれども、挙げておくと切りがないので、今度は、剣闘士のスタイルのほうに移ります。

剣闘士のスタイルは、いろいろなものがありました。最初のころは、サムニウム闘士と呼ばれている、つまり、共和政の中期に、戦争捕虜になった人々です。サムニウム人というのは、イタリア半島の中の部族であり、山岳地域にいた人たちです。彼らとやはり戦っていく中で戦争捕虜になると、それを同じような格好をさせて戦わせるということになったようです。だから、初期にはこのサムニウム闘士は多かったですけども、だんだん数の上では、紀元前後になると、もう廃れていっています。

それから、あとは、どのような武装（アルマトゥライ）をしていたかであり、なかにはほとんど武装をしていないような剣闘士もおりますし、*thraex*というのは、トラキア闘士というところです。

紀元前の七三年から七一年ぐらいにかけて、スパルタクスの反乱という大変な奴隷反乱が起りました。スパルタクスがこのトラキア出身だったので、恐らくスパルタクスはこの *thraex* の格好をさせられていたんじゃないかというふうに思えます。ただ、時と共に変遷していきますから、先ほどのコロッセオの階段の柱の数と同じように、そんなにリアルに再現しようなんて意識は、ローマ人あるいは古代人にはないわけです。

つまり、剣闘士の戦いは、演出効果というか、きらびやかさを狙っているようなところがあります。必ずしもリアルな再現ではないけれども、こういうトラキア闘士があり、また、*hoplomachus* というのは重装闘士といわれている人たちもいます。

それから、*retarius* という闘士がいます。顔を表に出しており、出てくる網闘士と呼ばれている剣闘士です。で、網を投げて相手の

武器を使えなくする、あるいは、相手の体に巻き付けるという場面ですが、そういういろんな闘士のスタイルがありました。その中でも、剣闘士のモザイク画の中で私が一番好きな図柄が拙著『帝国を魅せる剣闘士』（山川出版社）という本の表紙に使ったものです。

いろんな戦いの場面の中でも、生き生きとした、いかにもある瞬間を描き出したというのがよく出ているモザイク画です。

こういうふうには、モザイク画もあり、レリーフもありますし、それから、彫像もあります。けれども、それだけでは満足しないで、最近では、よく実験考古学と名付けられておりまして、これは、右側が先ほど言いました網闘士で、上が裸で右手に網を持っていると。そして、左が、*secutor*と呼ばれている追撃闘士です。このように、いろんな資料、図柄や、あるいは文献として残っているもの、あるいは、実物も、盾とか、かぶととかが遺物として残っていますから、そういうものを根拠にして、再現するのが実験考古学であります。

マルクス・ユンケルマンという、ドイツの実験考古学の大家がいます。われわれがちょうど一〇年前に東京大学で国際シンポジウムをやったことがあります。最初、ドイツ人を呼ぶのには、予算上、二人しかないので、二人来てくれて言ったら、どうしても三人欲しいって言われました。三人っていうのは、要するに、自分以外に、あと二人の役者を連れてこないで、実験としての実演を見せられないということだったので、無理して三人を招きました。

彼らは国内・国外を問わずいろんなところをめぐっており、この種の興行を年に何回かは有志たちが集まってやっているようです。やはりこれも、ユンケルマンが復元したところの、ムルミッコ

(*murmillo*) と呼ばれる、魚のかぶとをした闘士と、それから、先ほどスパルタクスがそうだったトラキア闘士の再現です。

彼らが一〇年前に来たときに、このトラキア闘士の格好をした、この盾を持ってきましたので、私は、ちょっと抱えてみましたけれども、とても重いのです。八キロぐらいあるらしいのですよね。だから、相当体力がなければいけないのですが、盾のような防具が非常に重厚になると、今度は動きが鈍くなってくる。当たり前のことですが、そういうバランス関係があるようです。

それから、ムルミッコと呼ばれるものの再現図です。これは、モルミッコと、ホプリマテイクスですね。

これは、実際に金属製の肩当てが残っているわけですから、この例はルーブル美術館に展示されているものです。

それから、ポンペイから出土した剣闘士のトラキア闘士の兜で、これは非常に保存の度合いがいいですね。これなんかは、*murmillo* のかぶとですけれども、かなり破損している部分があります。

それから、追撃闘士 (*secutor*) と呼ばれている、全く、目の穴が、ちっちゃな穴が二カ所ついているだけなんです。そして、これ、作戦なんかでいろいろ書かれているんですけども、*secutor* との戦いは持久戦に持ち込んだほうがいいと。だんだん *secutor* は、視野が狭いし、それから、苦しくなってくるんです。何かやっぱり息をするところがないから。それで、苦しくなってきたら、ちゃんと顔を上げられるように、こういう仕組みにもなっていたようです。

要するに、かぶっていたほうが、それは安全であるけれども、息苦しくなってくるというようなことも起こってきます。

それから今度は、丸い盾の一つの例として挙げられるものです。この中には、ゴルゴーン・メデューサの顔が、いろいろな装飾が施してあって、美術的価値もそれなりに見ることがができる。盾の中では、これほどのものは珍しいんじゃないかと思うんですけども、それだけ手が込んでいるものです。

それから、戦闘の場面が、こういったランブの中に、剣闘士が刻まれています。剣闘士の戦いは非常に人気があるスポーツでしたから、戦車競走と並んで人気があります。戦車競走は、映画「ベン・ハー」に有名な場面があります。今の若い学生は、「ベン・ハー」なんて言っても五〇年以上前の映画ですから、あんまり見ていないかもしれませんが、いまだに、アカデミー賞を取った数では、一番多いのではないのでしょうか。一二部門取っており、あの「タイタニック」がタイ記録だったと思うのですが、それくらいよくできた映画でした。

戦車競走は、どうしても大掛かりになります。楕円形走路の片道で数百メートル、一周すれば、一五〇〇メートルとか、それぐらいの場所が必要です。ローマやカルタゴのような、大都会には戦車競走の場所がありますけれど、そんなに簡単には作れない。

ところが、剣闘士の円形闘技場は、わりと造りやすい、せいぜい一人人ぐらいが集まればいい。ロンドンやチェスターには、多分五千人大ぐらいが観戦する場所だったようです。そういうところがあるから、いろんなランブや何かの意匠に使ったり、こういう壁画に描かれたり、それから、レリーフもあります。これは、お墓ですが、そこにトラキア闘士であった人のレリーフを描いて、それを墓碑の

中に記しているわけです。

これは、攻撃態勢を整える *secutor* という追撃闘士のもので、彼らの戦う場面をレリーフの中に描いたものもあります。別に墓碑だけにはかぎりませんが、種々あります。

それから、網闘士の墓碑ですね。紀元後の三世紀のものですけれども、ロンドンの市立博物館にあるものです。

墓石、墓碑として残っているものはかなりあって、多くの場合は、妻のフェオルテと息子アスクレピアデスが建立したというふうに、建立者、親族がいれば、こういうふうに建ててくれたと書いてあるようなものが残っています。

これは、いろいろな物議を醸しているもので、大英博物館に展示されているので、ご覧になった方もいると思うんですけども、女性剣闘士、アマゾニアとアキリアとの戦いを描いた浮彫りですが、この二人とも兜をかぶっていません。

彼女たちは解放されたというふうに書かれているけれども、女性の剣闘士については、本当に血を流すような戦いをやらせたのか、あるいは、ショー的な催し物として、女性たちがちょっと出てきて戦う、そういう余興的なものとしてあったのか、それについては、いろいろ論争があるようです。実際に、確かに戦っているところがあります、やはり女性ですから、兜をかぶせるよりも、顔をちゃんと見せている場面として描かれているわけです。

私が一〇年前に行ったロンドンで見た新聞でも、もし、剣闘士が兜の中から見たらどういふふうに見えるかっていうのが再現してあったものもありました。

そういうふうには、今でも、先ほどのユンケルマンのグループが実験考古学的に再現したものがありませんように、非常にみんな面白くて、シヨリックなものとして、イギリス、ドイツ、それから、フランスやイタリアなんかでも楽しんでます。トルコでも、エフェソスなんかに行くとかやっていたようですが、とにかく、ローマの一つの象徴的なスポーツでした。スポーツと言えば聞こえがいいですけど、流血の戦いですから。

ローマにあるボルゲーゼ公園には、こういう剣闘士の戦いを描いてもあります。四世紀初頭のものですけれども、一一組が戦って、全員が殺されているシーンで描かれていますのですね。これは、後でもちょっと触れますけれども、剣闘士が実際にどれくらい亡くなったのか、という問題になります。しばしば負けた奴は、喉を刺されて殺されたんだというふうに言われていますし、そういうふうには思っていないらっしゃる方も多いかと思いますが、実際にはそうではなかったようです。

剣闘士が生き残る確率を考えると、一世紀ころ、つまり、ポンペイが埋没したのが七十九年ですから、その頃までのいろんな資料、例えば碑文で、どれくらい戦って、どれくらいが亡くなったかというようなことを事例を挙げていくことができます。紀元一世紀ぐらいいまでは、一〇人が戦うってことは、特別大きな戦いでない限りは一日、大体五〜六組ぐらいの戦いをやっていたようです。ポンペイなどでやっている限りは、五〜六組の戦いをやって、その中で殺された人は一人ぐらい。つまり、五〜六組の中のどれかの試合で

一人が実際に死ぬ。あとは、負けた人も許されるっていう形がほとんどでした。

許されるっていうのは、要するに、相撲なんかでも、「勝負には負けても、あの力士はいい試合をしましたね」っていうように、観客を楽しませれば、それなりの評価を受けるといことなわけです。だからしく負けたり、実際に傷を負ったりすることもあるわけですけども、とにかく少なくとも紀元後の一世紀ぐらいいまでは、五組に一人、つまり、一〇人に一人が殺されている、あるいは亡くなっているというようでした。

ところが、三世紀から四世紀ぐらになると、とてつもない数で死ぬようになっていく傾向があります。この四世紀初頭のボルゲーゼ公園のモザイクを見ますと、一一組ぐらいが戦って、敗者の全員が亡くなっているんです。全員が殺されたっていう形で、この例ではクビオという男が、死んだ顔が出ている、これは網闘士ですけれども、これが、死んだというので、串刺しになっている。この文字がタナトスであり、タナトス(死)の略として使っています。これは殺されたっていうふうには、これを全部見ていくと、敗者は全員が殺されたのであり、タナトスの記号が付いたものが一一組の全部に出ているのです。

そのころになると、恐らく、敗者の全員とは言わないにしても、一世紀のポンペイのところとはかなり様相が変わっていたんじゃないかというふうには、学者たちは推定しています。

実際に、その死の模様、博物館で展示されていました。エフェソスは今のトルコのエーゲ海岸にある遺跡ですけども、そこで実際

に発掘する中で、どうも剣闘士のお墓らしいのがあった。そこで出てきた骨の形跡を見るのですが、どういふふうにその骨が壊れているかというふうなことで見るわけです。そうすると、大腿部の骨の損傷が、こういうふうな四つの穴がついていると。

そうすると、先ほどの網闘士、retariusは、三本の平行した武器であったけれども、この穴を見る限りは、四つの穴を持った、上に、これは想像図ですけれども、未見の武器の再現物という、こういう武器で突き刺したんじゃないかっていうふうな、そういう推定もされております。上のほうには、retariusが持っている三叉の矛ですから、三本しかないわけですね。

こういうふうにして、骨のこの形跡から、どこがどういふふうに刺されていたのかということも、この図で幾つか再現をすることが、少なくとも推定することができるといふことです。実際にこの三叉の矛の痕というものも、確かに頭蓋骨の中からたどることができ、これも、頭蓋骨の損傷の形跡として残っているものです。

大きっぱい言えば、一世紀までと三世紀以後の剣闘士が殺される確率というのは違っていたと考えられます。あえて意味付けをすれば、一世紀のころは、人が殺されることよりも、むしろ、いい試合を見たいという、そういう強者を見る喜びがあったと思われれます。

ところが、だんだん人間が陰惨になってきたのか、敗者がほとんど殺されるような、三世紀後半から四世紀にかけては、何か人間たちが、死者を見る喜びを感じていたような、そういうことを感じさせないでもないところがあります。

そういうふうにして、この剣闘士競技の中でも、死者の時代とい

うのはいろいろたどることができます。

さらに、剣闘士の負傷と死体については、興味深い話があります。二世紀の医者にガレノスがいきました。彼は前五世紀のヒポクラテスに匹敵する、あるいは、それ以上の人だとも言えます。

ヒポクラテスが本当に存在したのかということについては様々な説があって、何人かの医学者をヒポクラテスという名前でひとくりにしているという考え方もありますが、ガレノスによれば、明らかに存在していると考えていたようです。ガレノスは、マルクス・アウレリウス帝の時代から、コンモドウス、セプティミウス・セウルスといった、紀元後二世紀の後半にいた五賢帝からその後の皇帝まで、ずっと宮廷の医師として活躍しています。その期間には、暗殺など隠微な事件が起こりますが、そんな中でも信頼を受けて、宮廷の医師として長期間活躍できたという非常にまれな例です。ガレノスは、故郷のペルガモンにいたときに、剣闘士の治療医に志願しています。そこで五十六年、治療医を務めているのです。

その時期は解剖学がほとんど禁止されていました。アレキサンドリアでなければ、死体でも解剖してはいけないという時期でした。そんな時代に、ガレノスは、剣闘士を治療すれば、実際に人間の体の仕組みをそこで見ることができると考えたのでしょう。彼は、そこで、医者としての自分の一種の修行として剣闘士治療の道を選んだというふうにいわれていますし、彼は、たいへんな名医でした。

何年前かに、ある医者に聞いたことで、現代の医学なんて、ヒポクラテスやガレノスの古代から、そんなに進歩していないって言う

んです。その医者によれば進歩したのは、検査の方法だけだったのです。

つまり、どこに病気の原因があるかということは、確かに突き止められるようになったけれど、それを治療するということになれば、必ずしもあの時代から進歩していないと、私は聞いたことがある。

前近代の医学っていうのは、実は、病気の原因そのものが、なかなか突き止められなかった。だから、間違った治療をするから、結局うまくいかなかった。現代は、少なくとも、病気の根本的なところまでは突き止められるようになったっていうようなことです。現代医学は、検査の方法が進歩したのであるという話を聞きました。ガレノスという人について、彼がたいそうな名医であったっていうことは、的確に病因をつきとめられたのではないか。そういうふうに考えられるのではないかと思います。

次の話題として、ポンペイ最後の日の話に移ります。

剣闘士とポンペイ最後の日、確かに映画ではそう取り上げられています。二つが組み合わさる可能性として、この映画の場面に、貴婦人と、その剣闘士が恋に落ちてっていうような、作り話みたいなことがあります。けれども、実はそうでもないのです。

この映画のカタログ解説は私が書いたのですが、剣闘士興行に熱中する人たちは、何も男性だけではなかったのです。これらの興行はいわば花形スポーツみたいなところがあって、女性たちも非常に熱いまなざしを注いでいました。それで、憧れの声援を送ったために、ポンペイには、たくさん落書きや広告が残っています。その一

部は、剣闘士興行を知らせる広告の落書きです。剣闘士興行の、どっちが勝った、何回勝ったとかの落書きもあります。

この種のものにはたくさんあり碑文もありますけれども、こういう落書きの中に、「娘たちのため息であるトラキア闘士ケラドゥス」とか、「網闘士クレステンスは少女たちの癒し手」であるとか、女性たちが非常に熱い視線を送っているような落書きが幾つも残っています。

それから、ポンペイが埋没したときに、きらびやかな金銀宝石で飾った貴婦人の、宝石の一部が残っているの、これは貴婦人だとわかるんですけども、それが、剣闘士営舎の中で発見されました。その周囲には、エメラルド、真珠や、二つの腕輪、指輪などが散らばって、宝箱にはカメオが入っていました。彼女は、恐らく愛人である剣闘士と並んで、大噴火の火山灰に埋もれながら死んでしまったのだらうということが推察されています。

剣闘士の中で、逃亡の危険があると、鎖につながれていた連中もいました。実際に、このポンペイの営舎の中で、剣闘士の死体の跡が四体分も発見されています。

このような映画の恋愛物語は、ハリウッド的な作り物だというふうに思いがちですが、剣闘士が非常に人気があった話や、営舎でこういう真珠やエメラルドを持った女性の跡をたどることができると、必ずしも絵空事ではなくて、現実にあったことだということがわかります。

では、ポンペイが最後の日にはどんなことが起こりえたのか、ということを考えてみます。これは、現在、公共広場からヴェスヴィ

オを見たものです。こういうふうに見えるんですけど、これも、午前中の早いときに行かないと、こんなにくっきりと見えないんです。だから、ちょっと昼ごろに行きますと、太陽が向こう側に行つて、ヴェスヴィオの山麓の、山並みがきれいに見えないんです。だから、何となく同じような色に見えることがある。これは、比較的早い時間に行つたんで、東から入ってきた太陽の光を受けて綺麗に撮れたんです。

この現在の実写と比べますと、ボンベイの壁画にあるヴェスヴィオ山を描いたものはかなり異なります。先ほど、古代人にはリアリズムの観念はなかったと言いました。でも大雑把にはそれらしく描いてもいます。こういうときだけ、急にリアリズムを持ち出すなつて言われるかもしれませんが、お許しください。現在見るヴェスヴィオのは、なだらかな、小さな富士山みたいな感じがしますが、古代の人たちが描いたこのヴェスヴィオ山っていうのは、もっと尖った形をしていました。

もちろん彼らには、休火山なんて意識はありません。ヴェスヴィオ山が、そんな火山などと想像もしていないわけです。それがいきなり噴火するわけです。

現在のわれわれの知識からすれば、ボンベイが噴火する八〇〇年ぐらい前に噴火した形跡があります。けれども、古代のなかの八〇〇年というスパンですから、何も記録は残っていない。結局、その当時の人たちは知らなかったわけです。

しかし、今よりも、恐らくもう少し高い山ではなかったかということなら、このように残っている絵からも推測することができます。

しかし、恐らく山頂近くまで行けば、何かこう、上のほうには、こういう火山らしきものの噴火の跡があったはずですよ。つまり、八〇〇年前に噴火を起こしているわけですから。

ただ、その当時の人々がそこに行つて、そういうことに気が付くかどうかということがあり、また、そもそも、今より高い山頂まで、実際にどれぐらいの人間が行つたのかということもありますね。けど、ほとんどの人は行っていませんから、そんなことは全く気が付かないはずですよ。しかし、七九年以前のヴェスヴィオ山は、よく見ればこういう形状をしていたのではないかと思われまます。

その山が、七九年の八月二四日、朝といつても、ほとんど昼に近い朝に噴火を開始しました。その様子が、小ブリニウスのおじさんである大ブリニウスが噴火直後に近くにいたので、甥の小ブリニウスの手で記されています。この大ブリニウスという人は、博物誌を書いたほどの大変な物好きであり、好奇心の強い人でした。だから、ものすごい天変地異の大事件が起こったのですから、関心がわかないはずはない。それは、もちろん救助を要請されたときミセヌムというナポリ湾の先端部にいたので、彼は対岸に渡って行きます。ミセヌムは艦隊の軍港であり、彼は艦隊の司令艦長だったので、そこから救助の要請があったときにボンベイ方向に船を出します。でも、うまくたどり着けなくて、ほかのところに行つてしまうことになるんですけど。

ボンベイの町が、ヴェスヴィオの東南にあるとすると、南には、現在、エルコラーノと呼ばれている、古代名ヘルクラネウムという町がありました。けれども、このエルコラーノのほうには、もう既

に早い時期に溶岩が、恐らくその前に土石流が襲っていたんではないかといわれているんです。

ポンペイの近くには、噴火から恐らく一二時間ぐらいかけた時期に、火山灰や火山礫が降ってきたようです。大ブリニウスは、ぜんそく持ちだったんで、結局、救助に行ったのが災いして、いわば、火山の事故に直接遭ったというよりも、ぜんそく持ちであったために、火山灰にやられて、息絶えてしまいます。

このポンペイの町は、六メートル以上の火山灰と火山礫に埋められたとよく教科書には書いてあります。現在わかっているところでは、一番大きな被害は、二万五千メートルまで噴煙が上がって、やがて降下してきたことにあります。ものすごい大噴火を起こしたわけで、二万五千メートルまで上がったところで、だんだん、今度は下降を始めるわけです。

そのときに噴煙が、火山灰、火山礫、火山弾などといって、大雑把に一〜二ミリのものから、一センチ、二センチのもの、それから、五センチから一〇センチとか、それぐらいの、これはあくまでもカテゴリーの分けただけですけども、そういったものが相次いで降り注いでくる。

だいたい一センチぐらいの火山礫であれば、一時間に二〇センチから二五センチぐらい積もる。だから、一〇時間たって、大体三メートルぐらい積もったところまでいったらうと思います。

ところが、このときに、高いところまで吹き上げた熱がだんだん下がってくる。それが、いわば火砕流として、火砕サージとして、ものすごい勢いで流れ降りてくるのです。地上近くになると、時速、

恐らく一〇〇キロぐらいあったのではないか。高く昇っていた噴煙が、急降下してきて、一斉にその周りに火砕サージとして流れる。これが、時速一〇〇キロから一二〇キロで、その温度が、一〇〇度から一五〇度といえますから、もう一瞬にして人間がそれのみ込まれてしまう。そのときにのみ込まれた人間の跡があります。

ポンペイというのは、意外と、つまり、決定的な破砕まで十数時間ありましたから、火山灰や火山礫が降り注いできたときならば、逃げた人は助かっているはずですよ。

だから、一万二千〜一万三千人ぐらいの人口のうち、恐らく八割近い人は、その間に逃げて助かったのではないかと言われています。残った人たちはどういう人かという点、金持ちが多かった。金持ちが多いというのは、自分の家は、割と立派な家だと思っただけから、上から多少のものが降りかかってきても、何とか壊れないでいる。だから、安全だろうと思って何時間かそこにいると、最後に火砕サージが急襲してきたから、もはや死しかありません。いろんなところでご覧になったと思いますけれども、人間が何か手を伸ばしながら、それから、誰かを抱きしめるような格好で亡くなっているというシーンは、そういう人たちが、こういう火砕サージに、本当に一瞬の間に遭った。そのために跡が残った形になりました。それが後になって発掘が一八世紀半ばから始まり、その発掘の過程で、生物の跡は空洞になっていますから、そこに石膏を流せば形をとることができます。それが、現在、よくポンペイの死者の場面として残っているわけです。

これは、溶岩によるものや、こういう様子は、一八世紀、一九世

紀の人たちの想像力を刺激したので、いろんな場面に描かれておりますけれども、これは、一世紀の、これはもちろん再現図です。ポンペイの噴火が起こる前の再現図として、ポンペイの町がここにあるわけですね。これは、エルコラーノの位置でしょうね。

これが、噴火がもう起こって、その後、一八世紀までは、ポンペイは、まだ発掘されていない時期です。その後、ここに何らかがあるということだんだんわかってくる。それが、現在、二〇〇〇年になったときは、もちろんポンペイも発掘されてありますけれども、その周辺にも、こういうふうにかくさんの集落ができていて、現在でもイタリア政府は、このヴェスヴィオ周辺からは、ちょっと撤退してほしいらしいです。

つまり、学者のなかには、非常に危険な、いまだにヴェスヴィオは大噴火を起こす、そろそろまた大噴火を起こす、そういう危険が迫っている、と推定する人もいます。それで、多くの人たちは撤退してほしいのです。でも、こは、火山灰の影響で、非常に土壌がいいんで、作物が採れやすい、だから、生産力がいいから、みんなここから、ある種の移転資金を出してもなかなか行きたがらないというのが、最近の一つの問題としてあるようです。

これは、ポンペイの中心部をなす公共広場であり、このスライドは、今度のポンペイという映画の中に出てくるシーンで、剣闘士の場面です。

これは、先ほど言いました火砕流の様子を。映画の場面でも、最後のところに火砕流が出てくる場所がありますので、そういう意味では、一八世紀や一九世紀の絵画なんかよりも、この場面は、映

画ではかなりリアルに再現されているのではないかと思います。

とにかくこのポンペイという映画では津波か何かが起こって、ポンペイの町が大きく波にのまれるシーンがあるのですけれども、それはなかったと思うんですね。もちろん、波がある程度引いていったとは記されています。だから、ある程度、何メートルかの、二〜三メートルぐらいの津波はあったかもしれないけども、ポンペイっていう町は、ちょっと小高いところにありますから、津波に襲われるようなことはありませんまい。そういうことを言い出すと、また、映画に対して妨害することになりますので、もうそれ以上は言いませんけれども。

でも、その核になる、映画としてのいろんな誇張された部分はありますけれども、やはりそういう核をよく踏まえた上で、それから、われわれの見る立場としては、映画だから誇張がある、ということを考えながら見れば、それなりに楽しめるんじゃないかと思えます。

私は、別に宣伝に来たわけじゃありませんので、あくまでもその映画の背景となる剣闘士の興行とポンペイ最後の日について、現在、われわれが知り得る限りの知見でお話ししました。

ご清聴、ありがとうございます。